

令和2年度 第2回

「松本市認知症施策推進協議会議事録」

松本市認知症施策推進協議会事務局

令和2年度第2回松本市認知症施策推進協議会

次 第

日時 令和2年11月5日（木）
午後1時30分から
場所 議員協議会室（東庁舎3階）

1 開会

2 あいさつ

3 会議事項

(1) 報告事項

若年性認知症支援広域ネットワーク会議開催報告について

(資料1)

(チラシ)

(2) 協議事項

第8期介護保険事業計画等の策定に向けた認知症施策について（案）

(資料2)

(資料2-1)

(参考資料)

4 その他

(1 開会)

事務局 午後1時30分、開会を宣言した。(委員12名のうち11名の出席があり、協議会設置要綱第6条第2項に基づき、会議は成立した)

(2 あいさつ)

会長 新型コロナウイルスが松本圏域でもじわじわと広がってきており、長野県の警戒レベルが1から2に引き上げられ、県のクラスター対策チームが松本圏域に派遣になった。これからインフルエンザを心配する時期でもあり、これから正念場を迎えていくところである。本日の協議事項にある第8期介護保険事業計画等の策定に向けた認知症施策についてということで、長谷川式スケールを作られた長谷川和夫先生の「ボクはやっと認知症のことがわかった」という本を持ってきた。この中に「昨日まで生きてきた続きに自分がいるんだ。認知症の人は何も知らないあちら側の人として扱う人がいるのだけれども、心は生きている。嫌なことをされれば傷つくし、褒めてもらえればやはり嬉しい」と書いてあった。そんなことを意識しながら、第8期介護保険事業計画等の認知症施策になっていくのかなと思っている。それも踏まえて協議していきたい。

(3 会議事項)

事務局 設置要綱第6条第1項に基づき会長が議長となり、挨拶をした。

議長 議長は報告事項の説明を求めた。

事務局 資料1、チラシに基づき、若年性認知症支援広域ネットワーク会議開催報告について説明した。

(意見・質問)

議長 議長は報告事項について、委員から意見・質問を求めた。

委員(議長) 資料1にある「ピアサポート」とはどういう意味か。

事務局 同じような立場によるサポートという意味。病院で診断を受けた方に対して、同じような立場の当事者が自分の体験をもとに様子等を話し、サポートしていく活動の事。

(協議事項)

議長 議長は協議事項の説明を求めた。

事務局 資料2、資料2-1、参考資料に基づき、第8期介護保険事業計画等の策定に向けた認知症施策について(案)説明した。

(意見・質問)

議長 議長は協議事項について、委員から意見・質問を求めた。

委員（議長） 第7期、第8期の期間について教えていただきたい。

事務局 第7期は平成30年度、令和元年度、2年度の3年間。第8期は、令和3年度、4年度、5年度の3年間。

事務局 介護保険事業計画は、3年毎に計画を作っている。現在第7期だが、その前の第6期計画が2025年（令和7年）を見込んだ計画となっており、第7期、第8期は、第6期を継承する計画となっている。認知症施策は、総合的な推進が必要だと介護保険事業計画で記載事項に位置付けられおり、明確に基本指針が政策の中で示されている。

委員（議長） 資料2 具体的な取り組み項目の中の、認知症についての普及啓発の取り組みの概要に書かれている世界アルツハイマー月間について教えて頂きたい。

事務局 世界アルツハイマーデーが9月21日に制定されている。9月をアルツハイマー月間としている。

委員 以前、薬剤師会の会員を対象にした認知症サポーター養成講座を受講したことがある。受講後、自分たちが何をしたらいいかわからないままとなり、これらからチームオレンジを設置していくにあたって、一回受講したらおしまいという形では対応が足りないと思っていた。ステップアップ講座という次の講座を受けることができるのは非常に良いと思う。ステップアップ講座について、具体的に考えていることがあれば教えて頂きたい。

事務局 ステップアップ講座の具体的な内容については、認知症地域支援推進員の現場の意見を取り入れながらこれから検討していくところである。チームオレンジを設立するにあたり、サポーターがステップアップ講座を受けるという流れの中で設置していく。

委員 社会福祉協議会に傾聴ボランティアというものがある。今年はコロナ禍の影響で、傾聴ボランティアの活動や研修会は自粛しているが、今後認知症サポーター養成講座と連携することで、傾聴ボランティアの育成を一緒にやらせてもらいたいと思っている。また、資料1の参加者に企業の名前が載っており、参考資料の図のように、企業の参加があったことはすごいと思う。徘徊高齢者の発見等についても、この図のように商店、企業、学生等と、情報提供のような連携が出来れば良いと感じた。

委員 チームオレンジのコーディネーターは、具体的にどういった方が担い手となるのか。認知症の方がコーディネーターに困り事を相談して、地域の人々

と関りをつなげていくのか、それとも介護保険のサービス担当者会議とは別の枠組みとなって関りをもつのか教えて頂きたい。

事務局

新たな組織を立ち上げることで支援者の負担が増えることもあるため、配慮しながら、カフェのような既存の物を利用していききたいと考えている。先進事例の具体的なものがあまりない為、研究しながらしっかりと検討していきたい。

委員

チームオレンジは、新しい取り組みで興味深い。認知症の入り口であれば初期集中支援チームが、介護認定を受けると介護保険のケアマネジャーが中心になってくると思う。チームオレンジがどんなタイミングでどんな支援を行うのだろうかと思っている。また、高齢者の方をお預かりしている施設の立場から、地域の活動に取り組みず運営する認知症カフェが今年の2月から閉鎖状態となっており、地域の方に向けた健康教室も取り組むめどが立っていない。いろいろな人が繋がりながら支援していくという流れの中、認知症施策をコロナ禍で具体的にどのように展開していくのか、知恵と工夫が必要だと思う。難しい話ではあるがぜひ検討していただきたい。

委員

チームオレンジのコーディネーターはどういった人達が担うのかということと、コロナ禍の中でこれらの事業計画が本当に実現可能なのかどうかを心配している。利用者さんや家族と接する中で、面会制限によるストレスの捌け口がない状況や、最期を迎える方たちの時間の過ごし方が大きく変わってきている現状を目の当たりにしており、コロナと一緒に関わる勉強が必要じゃないかと思っている。人と会うことを避けて閉じこもっている方たちがとても多く、出かけて頂きたくても出かけられずに、精神的に落ち込み、体力低下、機能低下という悪循環がどんどん加速している。オンライン、テレビ電話等で、人と接しなくても集まらなくても顔が見えて話ができる方法を早く考えていかなければいけないと思う。計画的に難しいとは思いますが、何とか乗り切らないと、精神状態の不安定な人たちが増えていってしまうということを心配している。

委員

資料2 徘徊高齢者家族支援サービス事業のところに、GPS や QR コードのついたシールのことが書かれているが、これがあれば早く発見できて重大なことにならなかつたろうということがあった。最新の情報はケアマネジャーや周りが勧めていかないと、家族は知りえないところがある。サービス事業者も知識を広げていくことが一番大事だと考えており、関心を持ってやっていきたい。リビングウィルに関して、事前に家族に相談しているが、いざとなった時に迷ってしまう。迷いがあつて当然だと思うけれども、意思決定できる時に本人にどう思うか聞いておくことが非常に大事だと思っている。

委員

警察署では、徘徊される高齢者の方が行方不明になると、行方不明者届を受理して、市の協力などをいただきながら発見に努めている。体感として、1

週間に1～2人は行方不明事案があると感じているが、今年は、消防防災課の協力を得て、行方不明家族の要請に基づき防災無線を流しての発見活動を強化している。また、最大限の搜索態勢を作るため、消防団の協力もいただいて連携した搜索活動なども行っている。GPSやQRコードを持っていると、警察へ届け出しなくても、家族で居場所が探せるという利点があるので、ぜひ普及して行ってほしい。また、発見して無事引き渡した後に、ご家族からGPSなどをどこで入手したらよいのだろうと相談を受けることがあり、そういった場合には、高齢福祉課を案内して、高齢福祉課でGPSをレンタルしていることをお伝えしている。今後、事業を進めていく上で、より使い勝手の良い、物に埋め込んだり身につけるGPSのような、より実用性の高いものをレンタルしていただいたり、より使いやすく効果的なものが普及していくと警察としてもありがたく、本当に人の命を守ることができると感じている。

委員

40年近く認知症の人と家族の会をやっていて一番残念に思うのは、未だに家族の方が認知症のことを隠す傾向があること。第2地区の公民館でやっているが、市外や地区外から相談に来ていて、地域ではしゃべりたくないと言われる。遠くから新しく相談にくる方は、前もってちょっと電話くださってから来ていただけると嬉しい。これだけ皆さんが一生懸命に取り組んでいても、家族はまだ隠しており、そこにギャップがある。家族会が続けられているのは、まだ悩んでいる方がいるからだと思う。アルツハイマー月間では、毎年欠かさず長野県内でチラシを配っている。

委員

資料1にある若年性認知症支援広域ネットワーク会議開催結果に参加させていただいた。当院でも数は少ないが、若年性の方で受診につながっている方がおられる。ネットワーク会議にも何名か参加を頂いている。若年性の施策として、一緒に取り組むことがあればやっていきたいと思っている。

委員

認知症ということを認めたくない、家族もそうあってほしくないという思いは、本人あるいは家族の心理として、どんな病気にもあると思う。そういう意味ではチームオレンジという名前は素晴らしい。色に合わせるのはいい流れだと思う。診療を行う中で、ここ十年くらいの間に認知症の方が増えており、数に追いついていけないのではないかと感じている。また、昔に比べると本人に対する人権人格をすごく尊重するようになった。人格を尊重するという素晴らしい事と、手がかかるということをどうやって両立していくか。解決方法の一つとして、機械化IT化と横のつながりがある。こういった会議がますます必要だと感じた。

事務局

資料2の具体的な取組項目の中に、人生会議・リビングウィル・意思決定支援があつてよかった。面会がままならない状況で最期の時を迎える方が多くなる中で、今だから少し先の事を考えましようとして一歩踏み込んだ話をする大きなきっかけがコロナ禍であると捉えている。自分の意思をきちんと伝えられない状況の方であっても、普段の生活の中で関わる人たちが、今きちんと

話が出来たらこう答えてくれるのではないかと、それぞれの観点で話しをする機会を予め持つなど、急いでいろいろやっておかなければいけない時代だと日々感じている。それは、施設の方であっても在宅の方であっても、認知症の方に関わらず全ての方に言えることだと思っている。

議長 他に意見がないことを確認し、以下の協議事項について協議会として了承し、事を終了した。

(4 その他)

課長 課長はその他の説明を求めた。

事務局 認知症思いやりパスブックの変更点について説明した。

課長 閉会を宣言し、午後2時50分散会した。